

---

# Emotion Diary Central

茅南 夕紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Emotion Diary Central

### 【Nコード】

N8112Y

### 【作者名】

茅南 夕紀

### 【あらすじ】

女剣士と王子の結婚一か月前からの一騒動。

一応恋愛物になるのかな？駆け引きとか無理なので、カップル成立してかなりたった後から話は進んでいきます。

\*別サイトに投稿していたものを修正しつつ転載しています。タイトルに深い意味はありません。

Diary(日記)とあるように過去の出来事を振り返りつつ進め

ていけたらなあといつぶらいで、書き始めた当時に知ってる単語を  
並べただけです。





## 冒頭詩とプロローグ（後書き）

投稿文字数に満たなかったため、冒頭詩と一部プロローグをつなげる形になりました；

## 1 - 1 話

街で過ごす大半の人々が暖かい我が家へと帰路につくこの時刻、城内では兵士や召用人といった者達の交代が行われる時である。

城仕えの者専用の食堂では、交代にこれから向かう者やすでに交代を終えた者がひっきりなしに出入りするため、厨房の火の上では具材が踊り、盛り付けられた料理は瞬く間に消えていく。

そんな中食堂へ行くこともなく、人気の無い一角で剣の素振りをしている一人の女性がいた。

透き通るような白い肌に、鋭い光を放つ灰色の瞳。

下の方で一つにまとめられたライトブルーの髪は彼女の動きに合わせ流水のように波打つ。

軽やかにそして華麗に、たんたん淡々とこなしている彼女だが、振っている剣は一般女性が扱う細身の剣よりも幅が太く、どちらかといえば一般男性が扱うものと大差ない。

やがて回避の動きも混ぜながら行われていくそれはまるで剣舞を踊っているかのようだ。

” ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ ”

太陽がすっかり地に潜り、鐘が次の時を告げる頃彼女は素振りを終え、ゆっくりと剣を降ろした。

剣を鞘ひざに納め、汗ばんだ額を手の甲で拭い空を見上げれば星が瞬いている。

「ユイカ、また剣か？」

後ろから掛けられた咎めるかのような声。

いつからそこに立っていたのか、気配を消して見ているなんて悪趣味だと胸の内で苦笑気味に呟きながら振り返る。

そこには漆黒の髪にエメラルドのように碧い瞳を持つ青年が立っていた。

王族にしか許されない紫（彼の場合は青みがかつた紫）の衣を纏い、その上から羽織る赤い豪華なマントを王家の紋章が入った金のブローチで留めた姿を見れば彼が何者であるかすぐにわかるだろう。

「ええ、王子殿下」

その言葉に彼は何故か顔を顰め憮然とする。

エリカス・デュアル・フォンシエルこの国の第一王子だ。

次いで臣下の礼を取ろうとしたら手を掴んで止められてしまった。

「礼儀」は今はいらない。ユイカ・・何度言えばわかる？  
君はもうすぐ私の妻になるんだぞ？」

「それでも今はまだ王城に使える剣士の身。

そのような無礼はできません」

妻になってもそんな無礼は出来そうにないとは思っけど。

「女の身でありながら、唯一王城に仕える城廷剣士か……  
しかしだ、結婚まで一カ月を切ろうとしている。

そろそろ剣を置いて身を落ちつけてくれな……」

「絶対嫌！！」

結婚が正式に決まってから何度も繰り返された議論に体がカッと熱くなる。

「私から剣を取ったら何が残るといふの？」

王城に嫁ぐ者としてマナーや礼儀もきちんと学んでいるのどこが不満？

私は、置かずにすむ限りは絶対に剣を置いたりなんかしないんだから！！」

気づいたら言葉を遮<sup>かき</sup>ってエリカスに噛みついていた。

「不満か、それはいろいろとあるし君ならそれはとっくに・・・と、それよりもだ」

そこで掴まれたままだった手をぐいっと引っ張られ、耳のそばで意地の悪い低い声が囁<sup>ささ</sup>かれる。

「やっと普通に話してくれたね」

顔に血が上ったのが分かった。

「も、申し訳ございません！」

ふと気配を感じ、そのまま彼の腕に閉じ込められるよりも早く抜け出すと、私は頭を深々と下げる。

「・・・ユイカ？」

少し寂しそうな彼の声。  
ただど恥ずかしくて頭を上げることができない。  
城では・・・特にいつ誰がくるか分からない城庭ではやらないように  
気を付けていたのに。

そんな彼女にエリカスは優しく微笑んだ。  
普段は毅然きぜんとして他人を寄せ付けない彼女のこんな様子を見るのは  
楽しく、心地よいものだ。

「頭をあげてくれ、君が普通に話してくれるほうが私も嬉しい。  
さて、私は父上に呼ばれているからこれで失礼するよ。  
剣のことについてはまた話し合おう。」

彼がマントを翻ひるがえし去っていく気配を感じ、ユイカはゆっくりと視線  
をあげ後姿を見送った。

「エリカス・・・」

幾度話し合おうとも平行線をたどるそれ。  
『君ならそれはとづくに・・・』  
そう分かって言っている。  
でも、認められないのだ。  
何故なら・・・

「けつ。なんだあれは？  
こんなところでいちゃつきやがって、いい迷惑だ！」

エリカスの姿が見えなくなった途端、聞こえよがしに声を張り上げる者がいた。

城に仕える兵士達だ。

回想を遮られ、ユイカはため息をついた。

( いつもいつも、ご苦労様…………… )

食事を終えた足でそのままここへ来たのだろう、酒を飲み赤ら顔になった彼らは軽鎧を身に着けたままだった。

これから宿舎に向かうのだと思われる。

ここから真逆の位置にある兵宿舎へ、わざわざ、遠回りして・・・

ユイカは何事もなかったかのように身なりを整え、新緑のマントを羽織り剣を背負うと、兵士達の前を横切って裏門の方へと歩き出した。

あまりにも優雅に平然と無視をされ、思わず息を詰めてそれを見送りそうになった兵士達はいきり立った。

毎日何を言っても反応一つされないのはどうも気に食わない。

いや、もともと存在自体が気に食わないのだが。

「 だから、お前みたいな女が城に居るのは嫌なんだよ！！ 」

『 風紀が乱れる 』と言わんばかりのこの言葉に彼女の足が止まった。ゆっくり向き直り、「 そうだそうだ！ 」と騒ぎ立てる兵士達を射るような眼差しで見渡してきた。

「 なにか問題でも？ 」

まだ夏のはずなのに、冷気がすつと降りる。

思わず口を噤んだ兵士達だったが、一人だけは黙らなかつた。

兵士達の中で最近実力が抜きんできたケルハンスという男だ。

「お前のようなか弱い女が剣士として城に居る時点ですでに問題じゃないか？」

女が剣士なんて、王に取り入ったとしか考えられないか。いや、現にそうだろうか？もうすぐ王子と結婚するのだからな」

その者の嘲るような言葉と態度に空気はキンツと張り詰め、周りの兵士達の体感温度は氷点下を超えた。

「黙りなさい、王と王子を侮辱するつもりですか？」

静かな硬い声。

「私が城に仕えるのは剣士としての実力です」

「実力？ ハハハ…面白い。」

ならその実力とやらを見せてもらおうじゃないか。

俺と勝負しろ。

俺が勝つたらお前は剣士を名乗るのをやめろ。」

「いいでしょう。その代わりに私が勝つたら、先程の言葉を取り消してもらいます。」

「ああ、取り消してやるよ。」

「では」

ユイカは背負っていた剣をスラリと抜き両手で構えた。

「ふん」

ケルハンスもユイカの剣よりか細身の兵士用の剣を抜くと片手で構えた。

互いに間合いを計り、周りが固唾を呑んで見守る中ピリピリとした緊張感が一気に高まり、澄んだ金属音が夜空高く響いていった

## 1 - 1 話 (後書き)

強い女性は憧れです。使いにくかるうとなんだらうと背中に背負った剣も・・・

今読み直すとなんでこんな無礼な兵士がいたんだらう。

結婚することが決まる前だったら分かるエピソードだと思っんですが(たぶん)、王子様と結婚決まってる人とやり合うなんてわからない。おバカなのだらうか・・・

というか、なんで上から目線。

代わりになりそうなエピソードが思いつかなかったので、このまま載せるしかないのですけども。

1 - 2 話

「はあ・・・」

エリカスは廊下をのろのろと歩いていった。

王の部屋へと近づくにつれどんどん憂鬱ゆううつになっていく。

なぜなら、父親に呼ばれた理由の予想がつくからである。

（ また結婚式の打ち合わせかなあ…… 父上、大乗り気だし…… ）

別に結婚式を挙げるのが嫌なわけではない。

民間人の女性との結婚を王が祝福してくれるのは喜ぶべきだろう。ただ、張り切りすぎるのはどうかと思う。

（ 父上が全て決めてしまうから、私が居ても意味がないよな ）  
そう、

「 ここはどうしたらよいかのう？」

と聞かれたとしても

「 おおそうだ！ エルマスニカ様式の調度品ならどうだ！？

あのデザインなら神秘的な空間が作り上げられるに違いない！

！

と一人で自問自答の末、解決してしまうのだ。

もう好きにしてくれ、と言いたい……。

（ なんの為に私は呼ばれるんだろう・・・ ）

そんな事を考え歩いているうちに、両開きの大きな扉の前へとたどり着く。

他の部屋とあきらかに違い質が高く、それぞれ無垢材の一枚板でできた扉。

王の部屋へと着いてしまった。

「はあ・・・」

エリカスはもう一度溜息をつく。扉を守る兵士に声を掛けようとした。ところが廊下の向こうから人が走って来るのが見え、そちらに目をやる。

彼らはよほど急いでいるのか、エリカスに気付かず横を走り抜けていく。

（ 廊下を走るなんて礼儀がなっていない ）

緊急なのかもしれないが、王の部屋を素通りしている所をみると違うような気がする。

注意しようとしたエリカスだったが、

「 おい、西の城庭だったよな？ 」

「 ああ、ユイカとケルハンスどっちが勝つだろうな 」

「俺はユイカだと思っぞ」

「いや、ケルハンスもあなどれんだろっ、彼は最近の注目株だぞ」

「まだ間に合うよな？」

「わからん。とにかく逃げ！！」

バタバタという足音とそんな内容の会話を残してその者達が見えなくなっただけには、そのまま固まってしまったエリカスの姿がポツンとあった。

（ユイカが西の城庭で戦ってる…戦ってる…）

その言葉が頭の中でグルグル駆け巡る。

それが落ち着き理解した時、エリカスは拳を握ってブルブルと震えた。

「結婚の前だと言うのに、怪我でもしたらどうするんだ！

あのじゃじゃ馬が　　っ！　ユイカくっッ！！」

エリカスは吼え（ほ）ると、王に呼ばれていた事も忘れ、中庭へと一目散に駆けていった。

\*\*\*

エリカスが中庭へ駆けつけるとそこは人で溢れ返っていた。

貴族に、兵士、召使・・・まるで城内の人間が全て集まっているかのようで、先程ユイカと分かれたときの静けさが嘘みたいだ。おかげで怒鳴りつけた人物が全く見えない。

(どうにかして前へ出ないと)

エリカスが人込みを掻き分けようと手を挙げたときだった。ガキンツという音とともに折れた剣が弧を描き飛んでいくのが見えた。

「おおお」

というどよめきの後

「ユイカが勝ったぞ〜!!!」

という誰かの宣言。

途端に辺りは歓声とブーイングの嵐が巻き起こる。

エリカスはその中へ必死に分け入っていった。

「ケルハンスが負けたか、あい変わらずユイカは強いな」

「ああ。これなら最近悪くなっている都の治安も、じきに良くなるのではないか？」

「そうかもしれないな」

「おい、それはどういうことだ？　なぜ彼女が都の治安に関係する？」

少々不穏な話に近づいてみれば先ほど横を素通りしていった二人だ。

「王子殿下！ 実は・・・」

彼らから話を聞いたエリカスは見る間に青ざめていった。

「・・・なんだと？」

彼らから視線をずらし、前のほうまで進んでいたことよってやっと見えるようになったユイカを見詰める。

彼女は地面に仰向けに倒れているケルハンスへゆっくり剣先を向けたところだった。

「先程の言葉、取り消していただけますね？」

「・・・クソツ・・・取り消してやるよ！」

ケルハンスは悔しそうに地面へこぶしを叩きつける。それを聞きユイカは剣を鞘に収めた。

傷を負ってもいなければ、息一つ切らしていない。

ユイカとケルハンスの差は歴然としていた。

「ユイカ！！」

やっと人込みを抜け、現れたエリカスに人々は驚き、騒ぐのをやめた。

「王子殿下だ」

「なぜここに…」

「それよりやばくないか？」

なにせ、王子の妻となるユイカにブーイングや歓声（＝ファンコール）をしていたのだから…

敵が多いようで実は隠れファンが多いユイカではあったが、王子が剣士を辞めさせようとしているのは周知の事実である。それ（ファンコール）を喜ぶとは思えなかった。

決闘を見に来ていた者達は互いに目を見合わずと蜘蛛の子を散らすように逃げていき、中庭にいるのはユイカとエリカスの2人だけになった。

「ユイカ！ 君は分かっているのか？ 君は剣士である前に結婚を控えた身なんだぞ！」

「エリカス様・私、勝ちました！」

誇らしげに微笑んでいるユイカにエリカスは怒鳴った。

「それぐらい見れば分かる！ それよりもだな…」

「王子殿下！ 王様がお呼びです。すぐにお越しく下さい！」

話を遮られ、渋い顔をするエリカスにユイカはそつと言った。

「お呼びですよ」

「ああ！」

分かっているというようにエリカスは声を荒げた。  
けれどもユイカから目を逸らそうとしない。  
彼の瞳には何か迷っているような色が浮かんでいた。しかし、

「行ってくる」

押し殺した声でそれだけ言うと踵かかとを返し王の部屋へと向かって行った。

怒っているが、どこか寂しげな彼の背中にユイカは心を痛めた。  
彼がユイカの事を心配しているのはよく分かる。  
よく分かるが・・・

「仕方・・・ないよね・・・」

エリカスがユイカを心配するように、ユイカはエリカスが心配だった。

（あの人は結婚と同時に王位に就く。  
今まで以上に命が狙われてくる。  
それらから彼を守るのが、私の役目・・・）

だから、剣を持つのは止めるわけにはいかないのだ。  
剣士としての腕も上げていかなければならない。  
ユイカは鞘に納まっている剣を見て寂しげに笑った。

「離れられない運命、ね・・・。  
・・・さて、宿に帰ろうか」

気を取り直すとユイカは城を後にした。

1・2話(後書き)

できるだけ難しい漢字にはルビを振ってます。

## 2 - 1 話

城の通用口から外へ出たユイカは表門の方へと周り城の城門と繋がる大通りにでた。

そろそろ8の時ということもあり、そこかしこで香かぐわしい匂いが漂い、飲食店に立ち寄る客で溢れかえっている。

料理の匂いは混ぜつても嫌な臭いにならないのだから不思議だ。

( トマトとバジルの蒸し鶏サラダ、オニオンスープ、ビーンズキッシュ・・・ )

各店のメニューが無意識に目に入ってしまった空腹感が増してしまふ。

( うーん。食べて帰るか、宿の食堂で食べるかどっちにしよう？ )

普通、王宮に仕える者達は城にある専用の宿泊施設で寝泊りするのだが、ユイカはかつての戦友が経営する民宿で寝泊りをしている。

以前。といってもほんの2・3年前はユイカも城で寝泊りしていた。

なぜ今は城から離れたところで宿をとっているのかといえば、それは、戦友である彼の結婚が決まった日の事だった。

祝福の言葉を贈るユイカに対し彼は照れくさそうにしていたのだが、ふと頭を掻いていた手を止めると

『なあ、俺はこれを機に兵士を辞めて宿を開くんだが…。』

ん？ ああ、決定事項なんだもつ。辞表も出してきた。

ハハツ悪い悪い。

それでさユイカ、城で寝泊りするのはやめて俺の宿に来ないか？  
客第一号つて事で無料にしとくからさ。遠慮すんなつて。

何？ 嫁に悪い？ そんなこと気にすんな。

宿つてのはいろんな奴が泊まる所だ。

いちいち気にしていたらキリが無い、構やしないさ。

それに誰かさんから離れてみるつてのもいいもんだぜ。ハツハ

ツハ！  
』

そんな報告と提案をしてきたのだった。

当時は『誰かさん』が誰を指しているのか全く分からず首を傾げるしかなかったが、好意に素直に甘える事にした。

剣士という職業は傭兵のようなもので、いつ裏切られるか分からない危険性が高いことから城の者に嫌われやすい。

且つ、それが強い女性ならば尚更だ。ユイカも例外ではなかった。

うかつに城の外へ出ようものならスパイだのなんだのと何を言われるか分からない。

城内にいても常に一挙一動を監視されているような状態で精神的に  
くるものはかなりあった。

そんな彼女を彼は気遣ってくれたのだろう。

彼の所ならエリカスの信頼もある。(悪友なのだそうだ)  
ユイカは友に感謝した。

今はエリカスと婚約もしているし、以前よりかいくぶん風当たりも  
和らいだので城へ戻っても良いのだが、そうしないのは単にエリカ  
ス自身のせいだった。

彼は婚約と同時に、剣士を辞めるようユイカを説得しに来るよう  
になったのだ。

それだけでも気が滅入っているのに、これで城へ戻れば一晩かけて  
でも説得しに来るに違いない。

剣から離れるつもりは毛頭ないので、そんなのは嫌だった。

\*\*\*

ふと怒声が聞こえたような気がして後ろが気になりそちらを見遣っ  
た。

酔っぱらった男が一人店にいちやもんをつけているのが目に入る。

幸い近くにいた警備兵が気づいたようだ。

( 最近あきらかに増えたよね )

前へと目線を戻しゆっくり歩く。

特にここ一週間ぐらいだろうか？柄の悪い者が目立つように思う。  
その分警備も強化されているようだ。  
大通りは良くても小さい路地裏まで手が回るかは謎である。  
飲食店の数が少なくなってきた所で露天商で手鏡を売っているのを見つけ、手に取って眺めた。

（ 食べて帰るのは無し…かな？ ）

引き返してもいいのだが、もう半時もすればこの賑わっている通りも静かになるだろう。

そうになると帰るのがちょっと難しくなる。

手鏡には物陰からこちらを眺める剣呑な男達の姿が映っていた。

手鏡を露天商に返し、再びゆつくりと歩く。

路地裏へと入る道を1本・2本通り過ぎ、3本目で素早く曲がると更に細い道へと体を滑り込ませ、右へ左へと曲がって元の大通りへと出て来た道に戻る。

先ほど通り過ぎた2本目の路地でも同じことをやり、1本目の路地へと抜けて酒屋へ入る。

通り抜けしたと見せかけて、この主人に頼んでカウンターの下へと潜らせてもらい、念には念を入れて倉庫にある抜け道を使わせてもらった。

（この主人によるとこの抜け道はいたずら好きなガキ共の置き土産ということになっている）

8の時が半ば過ぎた頃ようやく宿にたどり着くことができた。

## 2 - 1 話 (後書き)

ちよつと矛盾してるところがあるよつにも思います・・・  
うまい言い訳はないものか・・・

## 2 - 2 話

「おう、帰ってきたか」

扉を開けると、そこには腕組みをした戦友が壁に寄りかかって立っていた。

「ただいまビッツ」

「晩飯は食べて帰ってきたのか？いつもより遅かったようだが」

「ちよつとね。」

城で喧嘩を吹っかけられて相手をしたり、街でつけてくる奴を撒いてたりしたから食べそこなっちゃったわ」

「それはちよつとって言うのか？」

「さあ？」

ユイカは肩を竦めた。

「それよりもビッツ、そんな所に立ってどうしたの？今の時間なら食堂は酒場の営業に変わった頃よね？」

「ここはビッツの意向で宿屋と酒場を両方経営している。」

「ああちよつとな」

ビッツはユイカを真似て肩を竦めた。

「お前を待ってたんだ。帰ってきた早々悪いが、下まで来てくれないか？」

「え、ええ…？」

（何かしら？）

ユイカはビッツの後へ続き階段を降りる。

「おい、帰ってきたぞ」

入口から奥にいる誰かにビッツが声をかけた。

”食い逃げ防止”とかで幅の狭い階段と入り口のため彼の背中に隠れて奥が見えない。

（誰？ それに今日はやけに静かね。）

そう、この時間は客の笑い声やグラスの音などで賑わっているはずなのだ。

それがビッツが入口から奥に声をかけられるぐらい静かである。

嫌な予感にユイカは怪訝な顔を浮かべた。

「ビッツ？」

「ま、入れ」

踊り場のわずかなスペースにビッツが下がり、促されるままに酒場へ入ると思わず驚きの声が出た。

「 エリカス！ どうしてここに！？ 」

「 友人の店へ飲みに来たのだが、いけなかったか？ 」

しれつと答える彼だが、聞きたいのはそんなことではない。いったいどうやって自分よりも先にここへ来たのかということのはもちろん、何の理由でここへわざわざやって来たのかということだ。

「 今夜はユイカ、お前とエリカスの貸し切りだ。

彼は一晚“じつくり”お前と酒が飲みたいのだそうだ 」

「 ええ！！ 」

“じつくり”と強調された言葉にユイカは叫んだ。

一晚じつくり酒を飲む。一晚じつくり話をする。

何の話かはおおよそ検討がつく・・・嫌な予感的中である。

「 ユイカ、ここに座らないか？ 」

エリカスは自分の隣の椅子を引き、たす訊ねた。

「 いいえ、ここで失礼するわ 」

あの話が始まったらすぐに上へ上がろうと、ユイカは酒場の入り口に立っていることを選んだ。が、

「 奥へ入れよ。俺が入れんだろうが 」

というビッツの言葉に、ユイカはしぶしぶエリカスの横まで来た。

しかし、座ろうとはしない。

「座らないのか？」

「ええ」

「そうか…、ビツツ水割りを二つくれ」

「私は普通の水で」

「そうしてやってくれ」

注文を受け、ビツツはカウンターに回り水割りを作り始めた。ユイカには水を出す。

つつけんどな態度のユイカにエリカスは内心ため息をついた。

（きちんと聞いてくれればいいのだが。）

「なあ、ユイカ」

「例の話ならしないわよ。何度も話した通り、私 剣士を辞めるつもりはありませんから。」

にべも無い彼女にエリカスは片眉を上げたが、そのまま話を続ける。

「それが、国王の勅命こくまうめいなら？」

「え？」

「その話が 国王の勅命ならどうだ？と言っている。知つての通り国王の命令は絶対だ。」

この国に所属している限り、命令は守ってもらつて。」

「う そ ー」

「嘘ではない。ここにこうして書状がある。」

エリカスは懐から書状を出して見せた。

解雇通知ではなく仮の扱いで停職となっていたが確かに国王直筆の署名があり、それは明日からとなっていた。

「明日正式な書類が君の下にも届くはずだ。」

「……………」

俯き震える彼女にエリカスは諭すように言った。

「君は結婚を控えた身だ。」

そして、結婚式まで後一ヶ月になろうとしている。

少しの怪我が一大事なんだよ。

今日みたいな事が起こっては困るんだ。

頼むから城で大人しくしていてくれないか？」

「~~~~~ バカ！！」

ユイカは叫ぶと階段を駆け上がっていった。

「 あれじゃあ、苦労するな。」

「 だろ？」

それでも今日は最後まで聞いてくれたのだから、いい方だ。  
エリカスはカランとグラスを傾かたむけた。  
上でビッツの妻アルテとユイカが話しているのが聞こえる。

「 あら、ユイカどうしたの？」

「 なんでもない……」

「 そう？ 食事はどうする？」

まだなら部屋まで持って行くわよ？」

「 ありがとう。食事はまだだけど、食欲が無くなって……今日はもう  
休むから。」

「 え、ええ……」

一人分の足音がさらに上へ登って行き、ドアの閉まる音がした。

## 2 - 2 話 (後書き)

矛盾した会話とか修正してたら思ったより手間取りました；

## 2・3話

「しっかし、よく国王が、あんな命令をだしたな。」

ユイカが聞いたら卒倒するだろうが、ユイカ隠れファンクラブの会長だろ？」

厳格げんかくそんな雰囲気なのに意外とミーハーな父親の姿を思い出しエリカスは苦笑した。

「だからこそ、かな。」

「だからこそ？」

先ほど西の城庭で会話したあの2人はこう切り出した。

『牢勤めの者から聞いた話ですが』と。

「お前も薄々気づいているだろうが、最近都の治安が悪くなってきた。」

「確かに、最近ガラの悪いやつが増えているな。それがどうした。」

「その理由は、ユイカの結婚が間近に迫ったからなんだ。」

「は？ ユイカの結婚が近いからガラの悪いやつが集まってくる？」

「なんだそれは？」

「強いやつを倒して名を上げようとする者はどこにでもいるだろう？  
ユイカも例外ではない。彼女は強いからな。」

「今までにも今日城で戦うことになったような事例は何度もあった。」

「が、その度に彼女は勝ってきた。  
結果、彼女はますます名を上げ狙う者が増えてきた。」

「もともと治安の悪化に伴い街の警備を強化して取り締まっていたんだが、」

「今日聞いた話によると、牢に捕らえた者達のほとんどがこう言っているそうだ。」

『ユイカと戦わせる』と「」

「成る程。その長い講釈を訳すと。  
ユイカが結婚して迂闊うかつに手を出せない存在になる前に勝って名を上げようってわけだな。」

「・・・そういうことだ。」

「連中が礼儀をわきまえて一対一で挑いどんでくるようなやつらならよかつたんだが、」

「いや、良くは無いがその方がずっとましだ。」

「だが、都に集まっている連中がそうするとも思えないからな。  
いくら彼女が強いと言っても大勢と戦って無事ですむとは思えない。」

「まして、今は結婚式前。」

当日、傷だらけの花嫁を迎え入れるわけにも行かないだろう？  
今まで、何事も無かったのが不思議だよ」

「手は先に打つ。か…」

なあ、ユイカから剣を取り上げる事だけが、あいつを守る唯一の方法か？」

「そう思うが、どうかしたか？」

「いや、その方法だと結婚式の日に不満を持った奴らが暴動を起こしかねないと思ってな」

「しかし、他に方法は無いだろうか？」

「いや、一つある。」

「そいつらに無理にでも一対一の礼儀を守らしてやればいいのか？」

「どうやって？」

「武器OKの腕試しをトーナメントで行うんだ。」

「そうすれば、体力を使いすぎないからユイカが負ける可能性も少ないだろう？」

「あいつと戦うまでに勝ち抜けられないようなやつは実力不足ってことだしな」

「それはそうだがユイカが怪我をしてもらっては困る」

「あのな」

ビッツは飽きた調子で続けた。

「ユイカが大怪我するのと、かすり傷程度ですむのと、結婚式で暴動が起こると、どれがいいんだ？」

「それは・・・」

「国王ホクホクで、ユイカは剣士を辞めずにお前と無事結婚式を迎えられて、暴動は起きない！」

これがベストじゃないか！！

かすり傷ぐらい大目にみるよ」

「すごい言われようだが、国王は”ユイカの戦う姿”が好きである。都に集まった者達も、機会チャンスが与えられるのだ文句は言えないだろう。ビッツの言うことはもっともだった。

「わかった、ユイカに話してくる・・・」

エリカスはしぶしぶ頷くと重い足取りでのろのろと上がるユイカの部屋へ上がって行った。

( まったく世話の焼ける・・・ )

ビッツは自分も何か飲もうとウイスキーの瓶を手を取った。貸切のため一般客は入ってこないし問題はないだろう。

砕いた氷をグラスに入れて中身を注ごうとして手を止める。

2階でドアをドンドンと叩く音がした。

そんなに強く叩かなくても中には聞こえているだろうに、隣の宿泊客に迷惑だ。

おおよそユイカが拗ねて扉をあけないのだろうか…。  
しかし、それを裏切るようにドアが開く音がした。  
と思った瞬間、ダダダツトいう音と共にエリカスが酒場に飛び込んできた。

「ビツツ！ ユイカがいない！！ 窓から外へ出たみたいなんだ。  
あいつ、外は危ないとさっき言っ…」

「言っていないだろ……。」

「え？ ……」

「お前、国王の命令で剣士を辞めさせるとしか言っていないぞ。」

「……………」

沈黙が酒場に下りた。

## 2 - 4 話

(エリカスの馬鹿！ばかばかばか！！そこまでする！？)

じっとしていることができなかったユイカは宿を抜け出した後、街からほど近い西の森までやってきていた。

あまりに腹立たしかったので、宿を抜けたことがばれないように窓から外へ出た。

玄関から出ていればアルテさんに見つかり、すぐにもエリカス達の所へとユイカが外へ出たことが伝えられていただろう。それからどうい風に行動したのかはよく覚えていない。

怒りにまかせてとにかく全速力以上のスピードでがむしゃらに走った。

そのせいか息が上がり、体が熱い。

膝に手を付き息を整えながら視線を上げるとそこには巨木が中央で根を張る湖が広がっていた。

少し湖面を見つめていたユイカだったが、すぐにマントをはずすと湖へ飛び込んだ。

服が濡れてしまいが構わない。

ライトブルーの髪が水に広がり溶け込む。

怒りを紛らわすには水を吸った服の纏わりつくような重みが丁度いいように思えた。

暫く一心に泳ぎ続けたユイカだったが漸く気持ち<sup>せうし</sup>が治まったのか滑らかに体を翻すと彼女は湖面に漂いながら月を見上げた。

顔の側で波打つ水はひんやりと冷たく、チャプチャプと心地よい音

を立てる。

頬ほほを風がなぜ、月明かりが自分を優しく包み込む。

月の光を受ける彼女の瞳は銀の様に輝いた。

（何故、今回強引に事を進めたのかしら？）

平静に戻ったユイカは先ほどの彼の話を思い返してみた。

いくら彼が彼女が剣を振るうのにいい顔をしていないとはいえ、今回のように彼女の意志を尊重しないということがあっただろうか？  
思い当たる節がない。

彼はユイカが納得するまで説得を続けようという姿勢だった。

（何か理由がある？）

ユイカが剣を持つのは彼を守るため。

なら彼がユイカに剣を持たせないようにしようとするのはなぜか？  
それはユイカを守るため。

（でも、そうそう私が危ない目に合うことってない気がするんだけど）

今日の城でのような出来事は割とよくある方だし、今まで全て返り討ちにしてきたことを考えれば国王から命令されるまで緊急だとも  
思えない。

剣の腕を信用していないのかと言いたくなる。

『少しのケガが一大事なんだ』

ふとその言葉が気になった。

彼はかすり傷でさえもとんでもないという感じで言っていたが、か

なり切迫していたことを思えば、これから割とすぐにケガをする可能性が出てくるようなニュアンスでも言っていた。

『頼むから城でおとなしくしていてくれないか？』

逆に言えば街にしていると危険だということだろうか。

最近の街の変化：変化と言えば、妙に柄の悪いのが増えていた。加えて自分の後を付けてくる男達。

今日は特に人数が多く撒くのが大変だったのを思い出す。

そこまで考えた時だった。

空気が変わった気がしてユイカは辺りを見回した。

（そうということね。）

上手に木陰に隠れてはいるが殺気は隠せていない。

気配を数えていくと50人余りもいた。しかもまだ続々と集まっている途中のようだ。

50人と言えば、大きい野党グループ分ぐらいか？

さらに人数が増えつつあるということは何グループかの野党だか何かが手を組んだということになる。

さすがの自分でもそれだけの人数と戦って無傷でいられる自信はない。

ユイカが思っている以上に大勢から彼女は狙われていたのだった。

（ちて、どつする…）

とにかく脱出しなければいけない。

頭に血が昇っていたせいでこんな困まれやすい場所へきてしまうとは…。

”どんな時でも冷静に”そう教えられたのに…。

唯一の救いは湖を抜け出す方法があることだった。

ただし、抜けた後が問題だ。

これだけの人数が集まり、今までにいくらでも機会チャンスはあったはずなのに誰一人襲ってこなかったということは…。

まさか自分が湖を抜けてしまうと思っただけはないだろうが、万が一を考えその後の手段も考えているはずだ。

「火をつける！」

あちこちでこだまするように号令が飛びかい、幻想的だった湖は男達の影と共に荒々しく闇に浮かび上がる。

「いたぞ！ あそこだ！！」

野党の1人がこちらを指差している。

考えている時間はもう無い。

ユイカは大きく息を吸い込むと、湖の奥深くへと潜っていった。

「上がってきた所を狙え！」

岸が上がってくるユイカを狙おうと、敵は武器を構えユイカを待った。

ところが3分・・・4分・・・5分・・・いくら待ってもユイカは上がってこない。

“ 溺れたのか？ ” と誰もが思ったときだった。

「 ユイカだ〜！ ユイカはこっちにいるぞ〜！！ 」

湖からかなり離れた所から途中待機していた仲間が叫ぶ声が聞こえ、武器を構えユイカを待っていた者達は驚き混乱した。湖から上がらずに森の奥へ抜け出すなんて出来ないはずだ、無理に決まっている。

「 何をしている！ 次の作戦を実行に移せ！！ ユイカを追い詰める！！ 」

一人の男が檄<sup>げき</sup>を飛ばし、その言葉に混乱した者達はハツとした。そう、状況は少し変わってしまったが、こんな時のために次の作戦があるのだ。

1人が森の中へ飛び込み、他の者も後に続く。最後の一人が森の中へ消え、湖は再び月明かりに照らされ始めた。しかし、静寂はまだ訪れなかった。

## 2 - 4 話 (後書き)

ちよっぴり遅くなりましたが更新です。  
登録してくださる方ありがとうございます。

## 2 - 5 話

キイイン、キイインと剣がぶつかり合い森の中で木霊こだまする。

ユイカは人数の圧倒的不利さから、敵ひとりひとりと対峙たいじするのではなく攻撃をいなして躲かわし、道を走り抜ける。

困まれたら一巻の終わりだ。

(どのぐらい進んだのかしら?)

おもったよりも早く他の敵に見つかってしまい、帰路の距離が稼げていないのは確かだ。

躲かわしても躲かわしても間髪いれずに現れる敵のおかげで、よく慣れた森とはいえ出口へは着実に向かっているはずだが遠回りさせられてる感じは否いなめない。

「ちっ  
」

ぬつとまた一人進路を塞ぐように現れる。

「邪魔するなら容赦はしないわよ！」

ユイカは攻撃に移った目の前の男に言い放つとそれまでの勢いを落とすことなく、敵の攻撃を回避し出来た隙について相手の剣を弾きあげる。

その動作の間に追いついた追手が横から突っ込んでくるのを足払いをして地面に倒し、その男達の横を駆け抜ける。

とどめを刺して少しでも人数を減らしたいところだが、それで後ろの追手に追いつかれる方が危険だ。

（ おかしい。まだ出口に辿り着かないなんて・・・ ）

ここまで街と湖は離れていなかったはず・・・そう思った時だった。

「 ！ 」

茂みを飛び越えたとたんユイカは空き地へ飛び出していた。  
瞬間逃げ場がないようにしつかりと囲まれてしまう。

「 ユイカ、観念しろ！ 」

ユイカは剣を持ったまま周りを見回し、逃げる隙を伺ったが見当たらないのを見て、諦めたように軽く肩を上げると構えを解いた。

「 たった一人にこの人数は卑怯だと思っただけど？ 」

「 ふん、勝てればいいんだよ！ さすがのお前もこれだけの人数を相手に勝つことはできまい 」

「 勝てる勝てないはともかく、こんなやり方で勝って嬉しいの？ 」

「 うるさい！！ どんなやり方で勝とうとそれだけで俺達の名は上がるんだ！！ 」

男がそう答え、仲間に合図する。

ユイカを囲む敵の輪がジリジリと狭まり始めた。

（ こんだけ人数が多いと、私が負けたとしてもそんなに自慢にならないと思っただけ・・・ ）

まあ、負ける気は毛頭ないのだが、多少の怪我は覚悟するしかないだろう。

誰かが大声でわめく姿が目に見えるようで、ユイカは内心ふっと微笑むと目をつぶり、ゆっくりと剣を水平に構えた。

「ほう、勝てればよいのか」

突然聞きなれた声が響き渡り、思わず集中が解けてユイカは驚きに目を見開いた。  
よく知っている人物が堂々たる面持ちで腕を組み、こちらを見ている。

「王子殿下！」

「げっ……」

王宮兵士一団体を引き連れエリカスが現れたのだ。

「お前達は包囲されている。速やかに武器を下ろし、投降しろ！」

「くっそ〜！」

敵達は歯噛みし悔しがった。まさかここで兵士に囲まれるとは思っていなかったのだ。

しかし、エリカスも爪が甘いというか忘れていることがある。

彼らの目的はユイカで彼女は輪の中心にいるのだ。

「このまま大人しく捕まっただまるか!!!」

「ただでは捕まらんぞ！ ユイカを道連れにしる！！」

敵達はユイカに向かって、一斉に飛びかかった。

「ユイカ！！」

一斉に輪の中心へと群がる敵にユイカの姿が見えなくなり、エリカスは叫んだ。

と、中心から爆風が起こったかの様に敵が吹き飛ばされていく。

再び見えるようになったユイカは片手で低く剣を構えていた。

敵の攻撃を受け止め弾き返すと、円を描くように薙ぎ払ったのだ。

「まったく、詰めが甘いぜ！ エリカス！ よつと」

頭上で声がし、一人の男が木の枝の上からユイカの側へ降り立った。切っ先が反り返った剣を握るその男は・・・

「ビッツ！！」

「よつ。」

助っ人登場！！と格好よくいくつもりだったんだが・・・

ビッツは辺りを見回しながら、ポリポリと頭を掻いた。

「この様子じゃ、いらなかったかな」

「いいえ。助かるわ」

「そうか？」

「ええ」

ユイカは軽く微笑んだ。

「ビッツが手伝ってくれば、早く帰れるもの」

「そうか…。」

「んじゃ、さっさと終わらせるか」

「ええ」

二人は背中合わせに立つと剣を構えた。

ユイカの敵に向き直った瞳が、先ほどと打って変わり冷たく光る。ビッツの方は対象的に張り詰めた空気は無く、顔には余裕そうな表情が浮かんでいる。

「ちつ。あいつまで出てきやがったか・・・」

男は呻うめいた。

「奴は何者だ？」

彼を良く知らない男はその男に尋ねた。

「元王宮兵士 王子殿下の直屬部隊 隊長だ。」

当時、奴の剣の腕前はユイカと1・2を争うと言われていた。引退してたはずなんだがな」

「そんな奴がどうしてここに？」

「知るか！」

「くそっ…。くるぞ…!!！」

質問していた男が慌てて前を向くと、ユイカとビッツがそれぞれの方向に走り出した後で、ユイカが目前まで迫っていた。

ユイカは武器を構えている敵の目前で足を踏み切ると、空高く舞い上がった。

自重と落下速度を加えて剣圧を下へと叩き付ける。

「うわああ!!！」

あまりの衝撃に耐えられず、野党達は地に平伏した。

それを見たビッツは思わずその場に立ち止まる。

チャンスとばかりに襲い掛かる敵の攻撃を避けながら器用にヒューッと軽く口笛を吹く。

「さすがユイカだ。俺も負けてられないな」

ビッツはニツと笑うと、対峙した相手の攻撃を剣で受け止めた。

弾かず、そのまま相手を巻き込むように体を回転させ、敵グループへ投げつける。

向こうが怯んでいる隙に追撃をしかけ、二人まとめて薙ぎ払った。ガクリと気絶する相手に、

「手加減はしといたからな」

そう言うと、ビッツは不適に笑った。

本気でやれば、気絶するだけでは終わらなかっただろう。

「さて、こんなもんか」

パンパンツとビッツは服の埃を払った。

あれから戦い続けること数十分、二人の周りには伸びきった敵達の姿が在った。

ユイカを倒し名を上げるために大人数を集めた野党達だったが、ユイカとビッツに内側から、エリカス率いる王宮兵士達に外側から攻められ、反撃らしい反撃をすることができないままに、捕らえられることとなったのだった。

兵士たちに指示を出したエリカスは急いでユイカのもとへと向かった。

「ユイカ！ 怪我はないか？」

「はい、大丈夫です。王子殿下」

「そうか…無事で何よりだ」

「ハツハツハ、相変わらず強いなお前は。

本当に俺の助けが必要だったのか？」

「ビッツが加勢してくれなかったら、怪我をせずに全員倒す事は出来なかったわ。

ありがとう。ほんとはこんな人数簡単に倒せるぐらい強くならないといけない…」

ユイカはそこで言葉をときらせるとクシヤミを一つした。

「ん？お前びしょぬれじゃないか、どうやってたらそんなに濡れるんだ？」

「…湖で泳いでいた所を襲われたから…」

「よし、それなら早く乾かした方がいい、急いで帰ろう」

エリカスはそう言うと、兵士に命令して馬を1頭連れてこさせた。

「え？きゃ！」

ふわりと、ユイカを抱き上げ馬上へ乗せると、自分もヒラリと後ろへ跨る。  
またが

「城へ戻る！全体進め！！」

「はっ！！！！」

兵士達は足並みをそろえ、行進し始めた。

「私、城に戻らなくても宿が…」

「じゃあなビッツ、じゃじゃ馬は連れて帰る。また会おう」

「おう」

ビッツはヒラヒラと手を振り城へ戻るエリカス達を見送った。

## 2・5話（後書き）

更新がさらに送れるかと、ちょっとヒヤヒヤ。

ぎこちないのがわかると思いますが、戦闘シーン書くの苦手です。

ユイカが超人のようになってしまった・・・

### 3 - 1 話

パチパチ・・・パチパチツ・・・

暖炉の中で薪がはぜ、心地よい音を立てる。

侍女達が用意した服に着替え乾いたタオルを肩にかけて、ユイカは一人暖炉前の床で膝を抱え、火に見入っていた。

ここはエリカスの私室だ。

けれど主は不在で、彼は今国王の下へ報告をしに行っている。

(エリカスと出合った日も、こんな感じだった…)

火を見つめていると思いき起こされる記憶。

あの日も城へ連れてこられた後、国王の下へ報告をしに行った彼をこうして暖炉の火に見入りながら待っていたのだ。

エリカスと出会う少し前、先ほど野党とやり合った森の湖の近くに在る洞窟、そこへユイカはやって来た。

「よし、ここなら野宿をしても問題なさそうね。

盗賊達の隠れ家に使われている形跡もないし、洞窟の奥に水が溜まっているから飲み水に困らないし、湖が近いから水浴びも出来るし、我ながらいい場所を見つけたものかわ。」

満足気に腰に手をあててうんうんと頷く少女。

「さてつと、他の人に見つからないようにしないとね」

一通り中を点検し終わったユイカは洞窟の入り口を蔦で覆い隠すなどカモフラージュする作業に取り掛かった。

「寒くなるまではここを拠点に活動ね。

街も近くて助かったわ。

活気があつていい雰囲気だし。

宿代が高いのが難点だけど、王都だし仕方ないか。

これが終つたら役所にも手配書を貰いに行つて、ついでに何か買って帰ろうつと」

ユイカ、当時16歳。

13歳で親元を離れた彼女は賞金首を捕まえ引き渡すことで生計を立てていた。

かなり危険の付きまとう生計の立て方であるが、とある約束のために剣の腕をあげなければいけない彼女にとっては一石二鳥なことだった。

雨など外に出る必要がない時に内職をすることもあつたが、それは暇つぶし程度の微々たるものだ。

「街から戻つたら水浴びにでも行くのかな。

しばらく体を洗う事が出来なかつたから、水浴びなんて久しぶりだわ」

ユイカはつきつきした気分で作業を終えると、街へ出かけていった。

\*\*\*

それから一週間後、都では森の湖に水の精霊が出るという噂で持ちきりになった。

「なんでも、西にある森の湖に夜出現するらしいぞ」

「透き通るような白い肌に、水に溶け込んでいるかのような髪の色、そして輝く銀の瞳だそうだ」

「月明かりに照らされた姿はとても美しいらしい」

「何かを見間違えたのではないのか？」

「水から現れ、水の中に消えると言われているぞ。」

人であればそこまで息がもつはずがなかるう。

水の精だと思えん」

「ふむ、湖に妖精が出る・・・か」

酒場に仕事の息抜きがてらお忍びで来ていたエリカスは、たまたま耳に入ってきたこの噂に興味を抱いた。

「なあビッツ、妖精なんぞ本当にいると思うか？」

「さあ、そんな事聞かれても俺にはわからん」

当時はまだ現役で、エリカス直属部隊隊長であり友として行動をよく共にしていたビッツはそう答えたものの、少し考え、

「まあ、噂にしちやあ容姿の特徴とか少々具体的だとは思っがな

…」

と言葉を付け足した。

「そうか…」

そのまま沈黙したエリカスはウイスキーが入ったグラスを傾けた。かたむ中を飲み干しテーブルの上にコンと置く。

「なあ、ビッツ。その噂かめてみないか？」

その顔にはいたずらっぽい笑みが浮かんでいる。ビッツは大げさに溜め息をついて見せながら、

「王子様が公務を放り出して退屈しのぎをしてもいいんですか？  
と一応、家臣である俺は聞いておくか」

とニヤツと笑って答えた。

「そんなの決まっている。私が良いと言ったら良いのだ」

二人は顔を見合わせると席を立ち、酒場を後にした。

\*\*\*

「でないな・・・」

それから一週間、精霊は夜にでるといふ情報から、エリカスとビッツは毎晩木の茂みに隠れて湖を張り込んでみたが、それらしきものが現れることはなかった。

「ビッツ。やはり噂は噂、と言うことだろうか？」

「さあなあ…まあ、まだそれを決めるのは速いだろう。最近、噂を確かめに人がよく来るようになったらしいからな。気配に敏感な奴だったら、出てこない可能性がある。」

「そうか…」

よし、それならもう少し粘ってみるか。

と言っても、さすがに仕事が溜まってきたから2・3日が限度ではあるが」

「そうだな」

そんな会話を交わして更に粘ること3日、けれど状況が変わることはなく精霊は現れなかった。

「やはり、現れないな」

「ああ。見張る時期は悪かったが、とりあえず噂は噂だったということだな」

「精霊とやらが本当にいるなら見てみたかったのだが…まあいいさ。」

城へ戻ろう。

仕事が山積みになって待っているぞ。当分自室から出られそうにないな」

「おかげさまで、俺は暫く王子様が部屋から逃げ出さないように見張ってなくちゃいけないわけだ」

「ハハハ…そういうことだな。それでは戻ろう」

「ああ」

二人が帰ろうと立ち上がりかけた時だった。キーンキーンと剣と剣とがぶつかり合う音と

「そこだ、捕まえろ！」

という怒声が二人の耳に届いた。

「エリカス！」

「わかっている。

・・・こつちへ近付いてきているな」

エリカスとビッツは茂みの影から、音が聞こえる方を注視した。

「出てきたぞ！」

それは湖の反対岸だった。誰かがが賊に囲まれ一人で応戦している。

「あれでは多勢に無勢だ。ビッツ、助太刀しに行くぞー！」

「おう！」

二人は茂みの影からそこへ向かって走り出した。

近付くにつれ、戦っているのは水色の長い髪に緑のマントを羽織った女性であることがわかった。

一発、二発と賊の攻撃を受け止め、弾き返し、相手が反動で体制を

整えられないでいる間に攻撃する。

横から攻撃されるも舞いを舞うかのようにかわして背後に回り、斬りつける。

彼女は、女性が振るうには不似合いの剣を構え、それなのに無駄なく流麗しゅうれいに賊と戦っていた。

「強い」

「このまま行くと、助太刀は必要なさそうだな」

たどり着くまでもう少しあるが、賊の数はすでに半分以下になっている。しかし、

「あ、危ない！！」

ふとした隙をつかれ、彼女は背後から斬りかかられた。

それにはすぐ気づいてなんとか身をかわしたようだが、無理な体制をとったのかバランスをくずし倒れた先は湖だった。

そしてそのまま上がってくる気配がない。

「溺れたのか？」

「わからん！」

やっと反対岸にたどり着いた二人は賊達の前に立ち、剣を抜いた。

「なんだ？お前達は？」

「それを言うことは出来ないが、お前達を倒すものだ」

「はあ？　そうか、わかったぞ。奴の仲間だな！  
野郎共、やっちなえ！！」

わあああ！と声を上げ、どっと賊達が襲い掛かってくる。  
けれど、相手が攻撃するよりも速く二人は相手の手や足を狙って斬り付け、攻撃をかわす間に肘で鳩尾を殴り攻撃した。

「うわ。」

「ぐお。」

うめき声を上げ、倒されていく賊達。  
勝てそうにないと判断した後の行動は速かった。

「くそつ。野郎共、撤退だ！！」

逃げ足だけは褒めたくなるような素早さで賊達がいなくなり、二人は急いで岸から湖の中を覗いた。

### 3 - 1 話 (後書き)

やっぱり戦闘シーンが難ありですね。  
剣の構え方の本を読んでみたりしてますが、内容がなかなか消化できません。

土曜日はちょっと更新が難しそうです。

### 3 - 2 話

「 ずい分時間が立っているが大丈夫だろうか… 」

必死に水中に目を凝らす、彼女の姿は見当たらない。

彼女は泳げなかったのだろうか？

しかし、泳げないなら普通はもっと水面で足掻くはずで、そんな気がどうもしない。

けれどこのままこうしていても埒<sup>らち</sup>があかないので潜<sup>ひそ</sup>ってみようかと思つた時だつた。

「 あら？ 敵がない？ 」

後ろからかかる女性の声。

その声に二人は驚き後ろを振り返つた。

そこには、水色の長い髪や衣服から水滴を滴らせた先程の女性の姿があつた。

「 あなたたちはやつらの仲間？ にしては雰囲気が違うわね。

やつらがいないってことは追ひ払つてくれたのかしら？ 」

「 ああ、俺達が追ひ払つた。

たまたまここへ散歩に来たら、お前さんが追われているのをみかけてね。

あまりに多勢に無勢だつたしな 」

「 とところで君は何故後ろから？ 湖に落ちたはずだよね？ 」

「 えっと・・・ 」

エリカスの質問に言い淀む女性。

いや、少女なのか？

大人びた顔はしているが若干幼い気がする。

その時、雲に隠れていた月が顔を出した。

その光を受け彼女の瞳は銀色に輝き、肌の白さは透き通るように際立つ。

それは一瞬のことで月はすぐに別の雲に隠れてしまったが、エリカスとビッツはハツとして顔を見合わせた。

「 ねぐらにしている場所と関連しているのであまり言いたくはないけど・・・私がここに居る時点で半分ばれてるようなものか 」

彼女はひとりごちるとからくりを簡単に説明した。

「 湖の中に近くの洞窟と繋がっている穴というかトンネルがあるんです 」

それを聞いて二人は確信した。

「 もしかして、そこから泳ぎに来ることがある？ 」

「 え、ええ。最近はや夜なのに人が多いからしてないけど・・・ 」

「 「 君だったのか！！ 」 」

「 え？ 」

首をかしげる彼女にエリカスは声をかけた。

「話は後だ。まず城へ戻ってその濡れた服をどうにかしよう」

「城って…？」

「あ、紹介が遅れた。私の名前はエリカス・デュアル・フォンシエルこの国の王子だ。」

「こっちは私の部下であり、友であるビッツ＝ファルデン」

エリカスの紹介にビッツは軽く一礼する。

「君の名前は？」

「え？」

「君の名前は？」

「ユイカです」

「ではユイカ、行こう」

強引に彼女の腕をひいて自分の馬に乗せ、後ろにまたがるとエリカスはビッツと共に帰城したのだった。

\*\*\*

「何を考えているんだ？」

報告を終え、部屋に帰ってきたエリカスはユイカの隣へ座った。

「ちょっと出会ったときのことを思い出していたの」

エリカスの個室なので、周りの目を気にする必要がないからか、ユイカの言葉遣いは普通だ。

「ああ、あの時か。」

確か賞金稼ぎをしながら、強い相手を求めて街に来ていたのだっただけだ。

「そう、それで目を付けられて追われていたのよ。」

「なんとなく数だと思っていたのだけど、湖に落ちてしまっただけだ。」

「・・・なんとなくね。落ちたはずの君が後ろから現れたときは驚いたよ」

「私だってただの水浴びが街中の噂になっているとは思わなかったわ。」

王子様がわざわざその噂を調べに来るほどだともね」

二人は顔を見合わせるとぷつと吹き出し笑いあった。

「それである後、父上が君を雇って」

「暫くして功績が認められて・・・今は王宮に仕える剣士か。」

でも、もう剣士でいることは出来ないのね・・・」

悲しそうにユイカはつぶやいた。

「・・・そのことだが、剣士をやめなくてもいいかもしれない」

「え？ どういうこと？」

「条件があるんだ。」

「10日後に行くことになった腕試し大会で優勝すること」

「エリカス！」

「ああ、ビッツに助言をもらってな。」

そのかわり優勝できなかったら、今度こそ本当に剣を扱うこと自体をやめてもらうよ？」

「いいわそれでも・・・」

私、嬉しい・・・ありがとう。」

ユイカの目から涙が溢れ、こぼれ落ちる。

「あれ？・・・」

思わず流れ出た涙に戸惑う彼女を改めて愛しいと思った。思わず彼女を抱き寄せ、その唇にそっとキスをする。

「な、何するのよ！」

ガバツと顔を離すとユイカはエリカスを軽く睨んだ。その顔は真っ赤になっている。

「 いいじゃないか、恋人同士なんだし 」

「 良くないわよ。わ、私にも心の準備が… 」

「 そうか、なら今度はきちんと受け取ってくれ 」

「 ちょ、ちょっと！ 」

「 ここは自分の個室であり、人払いもしてきたので誰かに邪魔されることはない。 」

「 数少ないチャンスは逃さないエリカスだった。 」

3 - 2 話 (後書き)

•  
•  
•

## 4 - 1 話

\*\*\*

” いいか、どうせなら国一番の剣士になるんだ。 それまでは・  
・  
”

\*\*\*

空いっぱい広がる青い空。

主なメイン通りにはいつもの店に加え、国のあちこちからやってきた行商人が構える店も立ち並び、道行く人々はそれらを覗き込んで食べ物や飲み物、この地域では珍しい品々などを物色する。

気に入った品物を購入する者、値段交渉に入る者。歩きながら購入した食品を口にする者。

街は人で溢れ返りまるでお祭りのような賑わいだ。

実際、武術大会が開催されているまっただ中なので、祭りがある時と似たようなものである。

そんな喧噪けんそうを遮さへぎるかのように、空にポンポンと小さな白い煙が3つあがる。

ここ何日かですっかり馴染みになったその光景は、今日の武術大会予選が始まったことを表していた。

あれから2週間と少し。

国内一の実力者を決めるといふ名目で武術大会の開催を募集受付を開始し、受付を終了したのが予選の始まる前日でそれが4日前。

今日は予選3日目にあたる。

本日は3日前から本戦を開始して今日あたりには武術大会が終わる予定だったらしいが、出場者募集期間が10日から2週間に延長された結果予定人数を軽くオーバーしてしまったらしい。

まあ他にも、どこから出てきたのか分からないが、戦績が良いものは国に雇用される可能性があるらしいという噂や、ユイカが参加するという情報が出回ったのも要因のひとつだ。

そこで急遽この1週間は予選とされ、今日が予選の3日目となる。

( ひま…… )

ユイカはぼんやりと窓枠にもたれかかり、打ち上げられた煙が薄れていくのを眺めた。

今日は自分が予選に出る日なので、闘技場の施設の一角にある小部屋で待機している。

この小部屋には小さい丸机と椅子が2脚あるのみで他に人もいない。外の喧噪もなんのその、闘技場の入り口が面している通りから一番奥にあるこの部屋まではさすがに届かず、見下ろせば目に入る樹木に止まる小鳥が囀るぐらい長閑だ。

簡素な内装なのはユイカがそう望んだからである。

他の予選選手はというと、反対側の棟に選手用控室が用意されているので、そちらに2部屋ぐらいに分けて詰め込まれているらしい。

……一応この部屋も選手用控室ではあるらしいが……。

こんなに静かで長閑なのに拘束感を感じて逆に疲れを覚える。

万が一のことを考えてなのは分かるが少々過保護すぎやしないかと思う。

彼としては、ここで過ごすのもあまり気に入らないらしく譲歩した結果がこれなので文句は言えないのだが。

その時のことを思い浮かべてユイカは苦笑いを浮かべた。

ほっとくと予選参加をすつとばして本戦からの出場にされそうだったのだ。

「そんなの参加者に不公平だし失礼よ！ だいたいそれで勝ったとして国一番の実力者と言えるの？」

話を聞いた時思わずそう言い返していた。

予選に参加せず力を温存して本戦から出れば勝つ確率が上がるのは目に見えている。

だいたい出場者全員同じ条件で勝ち上がるから面白いのだ。

そう言つて予選からの出場を彼に認めさせたのだが、代<sup>か</sup>わりの条件として個室を与えられることになった。

まあ、個室になったことで返つて彼の意図と逆向きな事象が起こっている気がしなくもないが・・・

ユイカは個室の入り口へ目をやると軽くため息をついた。

「アルテさん元気かな？」

入り口をみていると気が滅入りそうになったので再び空を見上げて別のことを考える。

会えないのはもちろん、素朴とはいえ彼女の手料理が食べれなくなつたのも寂しい。

湖で襲われた日からユイカは、ビッツの宿屋に宿泊することはなく  
王城の一室で過ごしていた。

あの出来事はユイカが街で過ごすことが出来る時間の限界も示して  
いたのだ。

いくら後をつけれられないように気を使っていたといっても、あのま  
ま過ごしていればいつかは宿泊先が割れ、宿屋が襲われる可能性は  
高かっただろう。

あのまま居座って迷惑をかける訳にはいかなかった。

木で囀っていた鳥が空へと羽ばたいていく。

それに伴いなんとなく下を見遣れば、黒い影が建物の影に走りこむ  
のが見えた。

（少しは暇が紛れるといいな・・・）

三度空を見上げたユイカの顔には微笑みが浮かんでいた。  
みたひ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8112y/>

---

Emotion Diary Central

2011年12月19日20時51分発行